戯曲テキストの讀み物化に關する一考察

——汲古閣本『白兎記』を中心として

土屋育子

はじめに

文字による出版物というものが、様々な形態のものがあるとはいえ、基本的に讀まれることを前提として作られている[1]ということは、ほとんど自明のことといってよいだろう。しかし、過去はもちろん現在に至るまで、讀書が勉強をすることと同義であることもあって、讀んで樂しむための出版物、娯樂書は、かなりおくれて登場することになった。これは中國に限らず世界的に見ても、ほぼ同時進行的に進んだこととといってよいであろう。では、いつ頃の、どのような段階のものから娯樂書といいうるかについては、意見が分かれるところであろうが、本論では出版文化が花開いた明代中期以降の、特に戯曲のテキストを取り上げ、それが讀み物として洗練されていく過程を考察することとしたい。

戯曲のテキストは、舞臺上の藝術、つまり、本來視覺・聽覺で鑑賞するものを、文字に起こして讀む形にしたものである。したがって、そこで當然豫想されるのは、古い時代においては、讀み物としては初期的段階にあるはずであり、時代が下るにつれて、徐々に體裁や表記などが整えられていくであろう、ということである。それでは、いったいどのような動きが見られるのであろうか。

明代の南曲における異なるテキストの成立については、田仲一成博士による重要な研究[2]がある。博士のテキスト分化のモデルによれば、明代においては、鄉村演劇から、宗族演劇、市場地演劇への階層分化が進み、戯曲テキストに鄉村演劇用、宗族演劇用、市場地演劇用という三種の分化を生み出すことになったとされる。これは實演における變化が、テキスト分化に重大な影響を及ぼした、との指摘である。この指摘は、中國演劇史全體の流れを視野に入れたものである。しかしながら、戯曲テキストには當時の出版業者によって出版されたものも數多くあり、出版されたテキストの成立には、出版者側の要因も考慮に入れる必要があるのではなかろうか。この點について、なおも論じるべき餘地があると考える。

本論でサンプルとするのは、南曲『白兎記』、五代後漢の創業者である劉知遠を主人公とする長篇の芝居である。『白兎記』には、先行する作品が存在し、かたりものの『劉知遠諸宮調』（冒頭と末尾のみ現存）、また、雜劇の『李三娘麻地捧印』（現存せず）などがつとに知

られている。[3] それらを受け繼ぐようにして、明代のテキストが現れるわけだが、本論における考察の對象として『白兎記』を選擇したのは、次に述べるように、成化、嘉靖、そして萬曆以降というように、刊行年代が異なるテキストがそろうためである。

現存する明代で最も古いテキストは、成化本『白兎記』[4]（以下成化本と略す）である。これは、一九六〇年代に『成化說唱詞話』とともに發見され、ほぼ完全な形で殘るテキストである。次に、嘉靖年間刊行の戲曲集である『風月錦囊』の中に、「劉智遠」という題のテキストがある。これは、物語を部分的につなげて始めから終わりまで收錄したもので、節略本というべきものである。

さらに明代後期になると、富春堂本や汲古閣本（『六十種曲』）など、『白兎記』のテキストとして代表的なものが刊行されている。特に汲古閣本は、『六十種曲』に收められる戲曲六十種のうちの一つである。『六十種曲』は、周知の如く明末の毛晉が刊行した戲曲集である。なおこの汲古閣本『白兎記』は、先に擧げた成化本と關係が深いと言われ、成化本系統という一つの系統をなしている。[5]

このほか、當時の地方劇の盛行とも連動するように、一幕ものの戲曲集（散齣集という）が數多く出版され、『白兎記』の有名な段が收錄されている。散齣集に收錄されるテキストにはそれぞれ微妙な差異が認められ、これは、當時戲曲が盛んに行われ、それに併せて出版が行われていたことを示すものと言える。

南曲『白兎記』のテキストについては、三つの系統があることが指摘されている。[6] 成化本系統[7]（先行研究では、最も普及したテキストの名を取って「汲古閣本系統」と呼ばれることが多いが、本論ではこの系統における最も古いテキストの名を冠することにする）、金陵唐氏富春堂が刊行した富春堂本を中心とする富春堂本系統、嘉靖年間刊行の『風月錦囊』を代表とする風月本系統である。

このうち成化本系統については、その中の汲古閣本が清代以降、『白兎記』の代表的なテキストになったこともあり、先行研究で言及されることが多い。とりわけ、成化本系統が他の系統と大きく異なっている點は注意すべきである。田仲一成博士は、「汲古閣刊本」（本論でいう成化本系統）と「富春堂刊本」の二系統について、「兩者は全く本文が異なるため別の作品というべき關係にあ」るとして、明確に系統の性格の違いを述べておられる。[8] このほか、孫崇濤氏が、『風月錦囊』を中心として各テキストの比較を行い、[9] また兪爲民氏が、系統間の曲辭の違いについて言及しておられる。[10] このように樣々な先行研究が行われているが、對象をある系統に限定せず、三つの系統の關係を檢討しながら、讀み物としてのテキストの成立まで視野に入れて說かれているかというと、十分になされているとは言い難い狀況にあると思われる。

三つの系統を見渡してみれば、『白兎記』の物語の全體像や戲曲テキストの讀み物化のありようも浮かび上がるのではないだろうか。そこで本論では、『白兎記』の各テキストを調査し、それぞれの繼承關係の考察を通し、戲曲テキストが讀み物としてどのような變化をたどっていくのか、その過程を明らかにすることを主な目的としたい。その方法として、清代以降『白兎記』の中心的なテキストとなった汲古閣本を軸とし、その成立についても說き及びたい。

一　テキストとあらすじ

まず『白兎記』の現存するテキストを擧げるが、いずれも南曲のテ

キストである。「南曲」とは、南方の音樂を用いた劇種を指し、宋元代には「南戲」、明代には「傳奇」と呼ばれる。本論では、便宜的に「南曲」に統一して話を進めることとする。なお、各テキストの前に附したアルファベットは、A：成化本系統、B：富春堂本系統、C：風月本系統であることを示す。ただし、テキストの中には、中間的要素を持つものもあるので、そのようなテキストには記號を併記する。BCとしたテキストは、富春堂本系統と風月本系統の二系統の要素を持っており、明確に分類しがたいものである。

Ⅰ　完本または完本に準じるテキスト

A①『新編劉知遠還鄉白兎記』北京永順堂刊　刊刻年代は不明だが、『成化說唱詞話』とともに發見されたことから、成化年間刊行と推定されている。（成化本）　……〔成〕

A②「白兎記」上下二卷『汲古閣六十種曲』所收　崇禎年間刊（なお、下卷の折の番號が亂れているため、上卷からの通し番號で示す。附表を參照）（汲古閣本）　……〔汲〕

B③『新刊出像音註增補劉智遠白兎記』豫人謝天祐校　金陵唐氏富春堂刊　萬曆年間刊（富春堂本）　……〔富〕

C④「劉智遠」（『風月錦囊』徐文昭編　嘉靖三十二年（一五五三）詹氏進賢堂重刊　スペイン・エスコリアル修道院圖書館藏　所收）『白兎記』の節略本（風月本）　……〔風〕

Ⅱ　散齣集（一幕ずつ收錄するテキスト）・その他

南曲は地方によって言葉や音樂が微妙に異なり、地名などを冠して「○○腔」と呼ばれる。現存するこれらのテキストは、大きく崑山腔とそれ以外の弋陽腔系の二種に分けられる。（⑤～⑮、⑰～⑲、㉑は『善本戲曲叢刊』（臺灣學生書局）所收）（略稱は附表に對應）

（1）弋陽腔系

B⑤『梨園會選古今傳奇滾調新詞樂府萬象新』八卷　殘本（目錄、前集卷一～前集卷四）安成阮祥宇編　劉齡甫梓　刊刻年不明　デンマーク・コペンハーゲン王立圖書館藏（萬象新）　……〔新〕

B⑥『精刻彙編新聲雅襍樂府大明天下春』八卷　殘本（卷四～卷八現存）編者、刊刻年など不明　オーストリア・ウィーン國立圖書館藏（天下春）　……〔天〕

B⑦『新刻京板青陽時調詞林一枝』四卷　玄明黃文華選輯　瀛賓郄綉甫同纂　閩建書林葉志元繡梓　「萬曆新歲孟冬月葉志元綉梓」の刊記　內閣文庫藏（詞林一枝）　……〔詞〕

B⑧『鼎刻時興滾調歌令玉谷新簧』五卷　內閣文庫藏（玉谷新簧）

B⑨『鼎雕崑池新調樂府八能奏錦』六卷（卷二～卷四原缺）汝川黃文華精選　書林蔡正河繡梓　刊記に「皇明萬曆新歲愛日堂蔡正河梓行」（八能奏錦）　……〔八〕

BC⑩『新刊徽板合像滾調樂府官腔摘錦奇音』六卷　徽歙襲正我選輯敦睦堂張三懷繡梓　萬曆三十九年（一六一一）刊　內閣文庫藏（摘錦奇音）　……〔摘〕

BC⑪『新鍥天下時尚南北徽池雅調』二卷　閩建書林熊稔寰彙輯　潭水燕石居主人刊梓（徽池雅調）　……〔徽〕

C⑫『新選南北樂府時調青崑』二卷　江湖黃儒卿彙選　書林四知館繡梓　清初刻本　內閣文庫等藏（時調青崑）　……〔時〕

（2）崑山腔（いずれも成化本系統に屬する。）

A⑬『新刻出像點板時尚崑腔雜曲醉怡情』八卷　明青溪菰蘆釣叟編清初古吳致和堂刊本（醉怡情）　……〔醉〕

A⑭『綴白裘』清・玩花主人編選　鴻文堂梓行　乾隆四十二年（一七

七七）校訂重鐫本

A⑮『納書楹曲譜』清・葉堂編　納書楹原刻　乾隆五十七年（一七九二）刊本（曲文のみ収録）（納書楹）……〔納〕

A⑯『六也曲譜』光緒三十四年（一九〇八）刊本（臺灣中華書局影印本）……〔六〕

（3）その他

A⑰『南音三籟』四巻　凌濛初輯　明末原刊本に清康熙増訂本を補ったもの。曲文のみ（上海古籍書店影印本）……〔籟〕

A⑱『彙纂元譜南曲九宮正始』不分巻　徐子室輯　紐少雅訂　順治八年（一六五一）序（九宮正始）……〔九〕

B⑲『新刊分類出像陶眞選粹樂府紅珊』十六巻（樂府紅珊）……〔紅〕

B⑳『群音類選』明胡文煥編　萬曆年間刊本　南北兩曲の散齣を收録『白兎記』は富春堂本とほぼ一致（中華書局影印本）……〔群〕

BC㉑『新鐫樂府清音歌林拾翠』初集、二集明無名氏編　清奎壁齋、寶聖樓、鄭元美等書林覆刻本（鄭元美原刻か）『白兎記』の他、『千金記』『西廂記』等を收録（歌林拾翠）……〔歌〕

『白兎記』のテキストは多岐にわたるが、以下の例では紙幅の都合上、代表的なテキストを擧げるにとどめる。

次に南曲『白兎記』のあらすじを、完本テキストから紹介しよう。

徐州沛縣沙陀村の劉智遠（歴史上の人物名としては「劉知遠」であるが、汲古閣本・富春堂本・風月本などでは「劉智遠」に作る。以下便宜的に「劉智遠」に統一する）は繼父に追い出され、博打をしながら馬鳴王廟で寢泊まりする生活をしている。たまたま馬鳴王廟（富春堂本は馬明王に作る）に家族でお詣りにやってきた李太公は劉智遠を氣に入り、娘の三娘の壻にする。劉智遠・三娘夫婦の幸せもつかの間、李太公夫婦が相次いで亡くなる。跡を繼いだ義兄と嫂は、劉智遠夫婦につらく當たるようになる。追いつめられた劉智遠は三娘を殘し、邠州の軍に身を投じる。軍で岳將軍に見込まれ、その娘岳氏と結婚することになる。一方故郷に殘された三娘はひとりで子を生み、臍の緒を咬みきったところから赤子に「咬臍」と名付ける。嫂が咬臍に危害を加えることを危惧した三娘は、人に頼んで邠州にいる夫のもとへ咬臍を送り屆ける。十六年後、成長した咬臍（岳氏によって承祐と改名される）が狩りに出たある日、白い兎に導かれ（書名の由來となるエピソードであるが、富春堂本には兎を追う場面が無く、代わりに「兎を探したが見つからなかった」という歌詞[12]が見える）、そうと知らずに實の母三娘に再會する。戻った咬臍は、劉智遠に貧しい女性と出逢ったことを話す。劉智遠はその女性が三娘であると悟り、磨房（粉ひき小屋のこと。汲古閣本では井戸のそばの「麻地」とする）で三娘との再會を果たす。劉智遠は義兄と嫂に復讐を果たし、三娘と岳氏の二人を妻に迎え、一同團圓する。

二　三つの系統の違い

三つの系統において、どのような違いが見られるのかということから確認していくことにしたい。

まず最初に擧げるのは、「汲水」の場面である。「汲水」は、李三娘と息子咬臍（承祐）との再會を描いている。雪の降る日、徐州に狩りにやってきた咬臍は、井戸のそばで水汲みをしている女性に出逢い彼女の境遇を尋ねる。その女性とは實の母三娘なのだが、咬臍はそのことに氣づかず、彼女の夫が劉智遠、その子の名が咬臍ときき、父親と自分の名とに一致することに非常に驚く。三娘を憐れに思った咬臍は、

夫を探し出し手紙を渡すことを三娘に約束する。

例1は、三娘が實の息子であると知らず咬臍にこれまでの苦勞を語る曲である。收錄するテキストは、成化本、汲古閣本、九宮正始、六也曲譜（以上成化本系統）、富春堂本、珊珊集、群音類選、天下春、八能奏錦（以上富春堂本系統）、摘錦奇音、徽池雅調、歌林拾翠、風月本である。各系統で曲辭が少しずつ異なっているので、內容的に對應する部分を揭げることにする。富春堂本系統と風月本系統とは曲牌が同じ【風入松】であるが、曲辭は異なっている。Aは成化本系統、Bは富春堂本系統、Cは風月本系統を示す。（■は判讀不能の文字、「く」「ゝ」等はおどり字を表す。なお文字はテキストにあるままとし、校訂する場合は括弧內に示す。以下同じ）

例1：汲古閣本30「汲水」　旦：三娘　外または小生：咬臍

A〔成〕【雁過沙】［旦］衙內問我甚情懷。［外白］甚情懷くくく、因何跣足蓬頭挑水、爲何來。［旦］也曾穿着繡羅鞋。［外白］你敢是挑水街頭賣×。［旦唱］又不曾挑水街頭賣。［外白］你敢是爲非作歹、趕你出來。［旦唱］我貞潔婦人、怎敢做事歹。……［外白］你曾嫁人家不曾。［旦唱］從東床也曾入門來。……招的劉知遠澆喬才。

A〔汲〕【雁過沙】［旦］衙內問我甚情懷。［小生］爲何鞋也不穿。

×××××××　×××［旦］也曾穿着繡×鞋。［小生］×敢是挑水××賣的。　××　×××××××　×××××××

×××× ［旦］×貞潔婦女、怎肯作事歹。……［小生］×曾有丈夫麼。　［旦］　×東牀也曾入門來。……嫁得個劉智遠潑喬才。

A〔九〕【雁過沙】×　衙內問我甚情懷。也曾穿着繡羅鞋。

貞潔婦女、怎肯作事歹。不曾挑水在街頭賣。雙親早喪十六載。被兄嫂做人忒毒害。

B〔富〕【不是路】［小生］…爲甚衝寒汲井泉。濕衣單蓬頭跣足眞可憐。…【風入松】［旦］恭承明問自羞慚。…幼蒙父母最矜憐。×雀屏開爲選良緣。［小生］你招贅叫甚麼名字。［旦唱］虧心短行劉智遠。

B〔天〕【不是路】［小生］…爲甚冲寒汲井邊。濕衣單跣足蓬頭眞可憐。…【風入松】［旦］恭承明問自羞慙。…幼蒙父母最矜憐。孔雀屏開爲選良緣。［小生］你招贅丈夫叫甚名字。［旦］虧心短幸劉智遠。

BC〔歌〕【不是路】［小生］…爲甚冲寒汲井泉。濕衣單蓬頭跣足眞可憐。…【風入松】［旦］恭承明問自羞慙。…幼蒙父母最矜憐。孔雀屏開爲選良緣。［小生］你丈夫叫甚名字。［旦］虧心短幸劉智遠。

BC〔徽〕【賺】［小生］…爲甚冒雪衝寒汲井泉。濕衣單跣足蓬頭眞可憐。…【風入松】［旦］恭承明問自羞慚。…幼蒙父母最矜怜。×雀屏開爲選良。［衆］你丈夫叫做甚麼名字。［旦］虧心短倖劉智遠。

BC〔摘〕【引】［旦］…休問我苦情懷。【不是路】…爲甚冲寒在此汲井泉。濕衣單蓬頭跣足眞可怜。…【風入松】［旦］說出來海闊天大。…奴守貞節全無意歹。…［小］可曾配人不曾。［旦］把奴配劉智遠那喬才。……

C〔風〕【風入松】［旦］小將軍休問我情懷。［外］問你便如何。［旦］說起×海闊天大。…×守眞潔全沒意歹。…［外］雙親在日、曾把你嫁人不曾。［旦］把奴家嫁與劉智遠那喬才。

前半部分、成化本系統では、「衙內問我甚情懷」、富春堂本系統では、「恭承明問自羞慙」、風月本系統では「小將軍休問我情懷」がやや成化本系統に似るが、「說起海闊天大」という他には見えない風月本系統獨自の句がある。このようにそれぞれ異なった部分を持つことから、曲辭の面で『白兎記』のテキストは、三つの系統に分けられることがわかる。なお、引用冒頭で、「跣足蓬頭」の四字が類似するが、これ

は定型表現であるので重要な一致とまではみなせない。また、成化本系統に分類される『九宮正始』は、先行研究で『白兎記』の古い形を殘すテキストとされている。[13]

その一方で、興味深い一致も見られる。風月本の「守眞潔全汲意歹」や「把奴家嫁與劉智遠那喬才」などは、汲古閣本の「怎肯作事歹」「嫁得個劉智遠潑喬才」に類似し、成化本系統との關係をうかがわせる。また、『摘錦奇音』では、引用冒頭の「休問我苦情懷」句は、風月本の「小將軍休問我情懷」に似るが、續く「爲甚冲寒在此汲井泉」は、富春堂本「爲甚衝寒汲井泉」に酷似する。さらに【風入松】「說出來海闊天大、奴守貞節全無意歹」以下の部分では、再び風月本とほぼ一致する。このように『摘錦奇音』では、富春堂本系統と風月本系統の曲辭が混じり合っているのである。

例1に擧げたように、比較をしてみると、三つの系統に分類することができ、分類が『白兎記』テキストの繼承を考える上で有用でありまた妥當であることがわかる。しかし同時に、系統を越えた影響關係が存在することも見えている。以下、さらに詳細に見ていくことにしたい。

三　系統間で共通する曲辭

それでは、『白兎記』のテキストを詳細に比べてみると、果たしてどのようなことがわかってくるのであろうか。前章で見た以外の例を、系統ごとに見ていくことにしよう。

（一）三つの系統間で共通する曲辭

『白兎記』のテキストでは、概ね各系統の違いによって曲辭が異なると言える。しかし、先に擧げたように、似通った曲辭は見られることがわかる。しかし、實はそればかりではなく、もっと明確に一致する曲辭が存在しているのである。次の例2でその部分「遊春」の場面を擧げてみよう。「遊春」を收錄するのは、汲古閣本、南音三籟、九宮正始（以上成化本系統）、富春堂本、珊珊集、詞林一枝、玉谷新簧、天下春、風月本である。成化本には見えない。（「＊數字」は臺詞・ト書きの插入位置を示し、臺詞は省略する。）

例2：汲古閣本8「遊春」　生：劉智遠　旦：三娘

A〔成〕（なし）

A〔汲〕【金井水紅花】〔生〕沽酒誰家好、　×前村問牧童。×××
×××× ×××遙指杏園中。好新豐。清帘風動。正好提壺挈榼、
那更玩無窮。　咱兩個醉春風也囉。

A〔九〕【金羅紅葉兒】×　沽酒誰家好、　×前村問牧童。×××
×××× ×××遙指杏園中。好新豐。青帘風送。正好提壺挈榼、
那更玩無窮。　咱兩箇醉春風也囉。

B〔富〕【金井梧桐】〔生〕問酒誰家有、　好前去問牧童。[*1]×××
×××× ××他遙指杏園中。好新豐。青帘風動。正好提壺挈榼、[*2]
緩步××扶筇。　咱兩箇醉東風也囉。

B〔詞〕【金索掛梧桐】〔生〕問酒誰家有、　好前去問牧童。[*1]×××
×××× 那牧童遙指杏園中。好新豐。[*2]青帘風動。正好提壺挈盒、[*3]
緩步兒出扶筇。咱兩個醉東風也囉。[*4]

B〔玉〕【金索掛梧桐】〔旦〕你問酒誰家有、[*1]×××問牧童。借問酒家
何處有。×牧童遙指杏花村、好新豐。[*3]青帘風動。正好提壺揭盒、[*4]
緩步××扶筇。只飲得醉東風也囉。[*5]

B〔天〕【金索掛梧桐】〔旦〕一對鴛鴦侶。〔携手同行〕相携碧翠叢。濃

綠重重。[i]

C〔風〕【金井梧桐】　×××××好、　×前村問牧童。×××
×××× ×××遙指杏園中。好新豐。清帘風動。正好提壺挈榼、
緩步××扶筇。　咱兩个醉東風也囉。

「遊春」は、劉智遠と三娘の夫婦が春の景色を愛でる穏やかな場面であるが、同時にこの後夫婦に降りかかる悲劇を際立たせる役割も兼ねている。なお、南曲では、このように物語の前半に春を愛でる場面を配する例がしばしば見られ、南曲の定型化したパターンと考えられる。[14]

例2では、『天下春』を除き、多少字句の違いが見られるものの、それぞれのテキストがほぼ共通する曲辭を持つことが明らかである。曲の前半は、杜牧の絕句「清明」の「借問酒家何處有、牧童遙指杏花村」をふまえている。成化本系統と富春堂本系統では、一句目が汲古閣本「沽酒誰家好」と富春堂本「問酒誰家有」というように違いが見られるが、そのあとはほぼ同じ曲辭が竝んでいる。

すでに述べたように、これまで、『白兎記』テキストの各系統は、物語の內容は共通するものの、全く異なる別のテキストとされてきた。ところが、このように共通する曲辭も存在しているのである。[15] これは一見當たり前のようにみえるが、實は一筋縄ではいかない。例えば、雜劇「呂蒙正風雪破窰記」（脈望館鈔本）と南曲『破窰記』（『李九我批評破窰記』二卷　書林陳含初・詹林我刊行）は、物語の內容面では同じ題材を扱ったものであるが、共通する曲辭がないため、曲辭の面からは全く異なる別作品ということができる。もちろん、雜劇と南曲という別のジャンル同士であれば、異なっていて當然ともいえる。しかし一方で、同じ題材の元刊雜劇と南曲の間にも共通する曲辭が見られることもある。[16] ここで大事なことは、『白兎記』テキストにおいて、『破窰記』の場合とは異なり、系統を越えた影響關係をうかがうことができるということである。

このような現象がなぜ生じたのであろうか。これについては、汲古閣本が編纂される際、「遊春」の場面を持つ別系統のテキストを參照していたことが理由として考えられる。もしもこの推測が妥當であれば、汲古閣本は成化本だけを直接繼承したものではなく、富春堂本或いは風月本に近い本文を持ったテキストなどにもとづいて編纂されたテキストであるということになるであろう。汲古閣本を刊行した毛晉の活動時期が明の最末期であったことを考えれば、『六十種曲』に收錄される『白兎記』が、當時見ることの出來た複數のテキストを參照して編纂されていたとしても不思議ではない。

（二）成化本系統と『風月錦囊』

『風月錦囊』は戲曲の節略本を收錄したテキストである。刊刻は嘉靖三十二年で成化本に次いで早いことから、比較的古い內容を殘しているテキストと考えてよいであろう。ここでは、『風月錦囊』所收「劉智遠」と成化本系統とを比較してみることにしたい。[17]

汲古閣本と風月本では、まず、物語の始まりである開場詩（「【滿庭芳】五代殘唐、漢劉知遠、生時紫霧紅(神)光、李家莊上、招贅做(作)東牀、二舅不容完聚、生巧計(使機謀)折散鴛行(折散鸞凰分飛去……)、三娘受苦產下咬臍郎。……」汲古閣本の本文を引く。成化本は曲牌なし）が共通している。ただ、戲曲のテキストでは、冒頭の開場詩が他のものと一致する場合が見られる。そのような場合は、單に開場詩を流用しているにすぎないこともあるので、ここでの例としては、それ

以外の部分から擧げることにしたい。

次に擧げる例3「訪友」は、劉智遠が遊び仲間と興じる場面である。收錄テキストは成化本・汲古閣本・風月本である。なお、同內容の場面は、富春堂本系統にも見られるが、曲辭が全く異なるので、ここでは取り上げない。（□は缺字。傍線は筆者による）

例3：汲古閣本2「訪友」　生：劉智遠　末または小生：史弘肇

A〔成〕【皂羅袍】［生唱］自恨×一身無奈。兄弟也論奔波勞役、受盡迍災。通文通武兩兼畀。目今怎生將來賣。［合］朝無依倚、交我怎生布擺。夜無衾蓋、交我怎生布擺。日長夜永我愁無奈。××［末唱］哥ゝ、且把愁腸寬解。論韓信乞食、瓢母××寧奈。有朝一日運通泰。男兒漢勇略中須在。［合前］　×××　×××　×××　×××　×××　×××

【玉抱肚】［生唱］凌雲毫氣。恨時乖難使。運至鎗刀上刀鎗上顯成功籍。此是我等之■。［合］腰金衣紫。知他是何日。想蒼天不負虧。ゞゞ

A〔汲〕【皂羅袍】［生］　自恨×一身無奈。　×××論奔波勞役、受盡迍災。　通文會武兩尷尬。　目今怎得將來買。［合］朝無依倚、××怎生佈擺。夜無衾蓋。××怎生擺劃。日長夜永×愁無奈。【前腔】［小生］勸你寬心寧耐。論韓信乞食、漂母××堪哀。忽朝一日運通泰。男兒志氣終須在。［合］那時腰金衣紫、日轉九階、一朝榮貴、名揚四海。那時節駟馬高車載。（【玉抱肚】曲なし）

C〔風〕【皂羅袍】［生］　自恨我一身無奈。　×××嘆奔波勞役、受盡迍災。　通文通武兩兼旺、　自今怎生將來□。□　朝無依倚。夜無衾蓋。家筵蕩費。××怎生布擺。日長晝永×愁無奈。×　［末］　勸你寬心寧奈。　論韓信乞食、漂母也只忍耐。有朝一日命通泰。男兒志氣終須在。［合］××腰金衣紫、日轉九階、一朝榮貴、名揚四海。那時×駟馬高車載。

【玉包肚】　凌雲毫氣。恨時乖難施。運至鎗刀下建功成績。此是我等之輩。［合］腰金衣紫。知他是何日。想蒼天不負虧。［末］伊休掛慮、平功名終須有日。待付大家、青史管取姓名題。

【皂羅袍】曲の前半では、三者の間に大きな異同は見られないが、興味深いのは後半からである。波線を附した「腰金衣紫～高車載」は成化本には見えず、汲古閣本と風月本に共通して見える。しかし、さらに細かな異同を見れば、成化本では「男兒漢勇略中須在」とある箇所が、汲古閣本と風月本では「男兒志氣終須在。」となっている。また傍線を附した【玉抱肚】（【玉包肚】）曲は、成化本と風月本にのみ見えるが、汲古閣本では見えない。汲古閣本では削除されたと考えられる。これらのことから、汲古閣本は、直接成化本を參照していたのではなく、成化本以外のテキストも參照していたということになるであろう。

また、次の例も見てみよう。

例4：汲古閣本17「巡更」、風月本7「小姐繡樓賞翫」

A〔成〕（なし）

A〔汲〕【月雲高】［生吊場］自別三娘面。勞役受萬千遍。到此投軍、數目都招遍。落在長行隊。提鈴報更點。湯風冒雪圖榮顯。受此飢寒。沒個可憐見。天天若肯週全。際會風雲、方表劉暠字智遠。

C〔風〕【月兒高】［生］　自別三娘面。勞碌受萬千。指望投軍貴、數目都招遍。落在他人、　提鈴報更點。天天若肯週全。　×××　×　×××××　×××××　風雲濟會、方表劉××智遠。

この例の場合も、成化本に見えない曲辭が、風月本と汲古閣本に共

通してみえる。汲古閣本と風月本両者の間に影響關係があることが推測される。

しかし、先に述べたように、『風月錦囊』所收「劉智遠」は節略本であり、『白兎記』の一部にすぎない。したがって、汲古閣本が風月本と一致するとはいえ、直接『風月錦囊』にもとづいているとするには愼重にならざるを得ない。その一方で風月本には、ここに擧げたような諸テキストと共通する曲のほかに、例えば、「慶賀元宵」の場面のように、他のテキストには見えない場面も收錄されている。したがって、風月本がもとづいたテキストは、現存するテキストとは異なる別系統のものであった可能性もある。

では、風月本と共通する曲辭が見えるのは、汲古閣本の成立とどのように關わるであろうか。汲古閣本の編纂時、風月本を直接參照していたとまでは言えないまでも、風月本がもとづいたテキストが汲古閣本に影響を與えている可能性が高いことにはなるであろう。風月本と汲古閣本の兩者に共通する祖本が存在することを想定することもできよう。

汲古閣本と風月本は、別系統として考えられているが、このように實は兩者が非常に接近していることを示す箇所もあるのである。このことから、汲古閣本『白兎記』は、成化本だけにもとづいているのではなく、複數のテキストを參照しながら、ある程度編纂者が手を入れたものと考えられよう。

(三) 富春堂本系統（弋陽腔系）と他の系統

富春堂本系統との關係も、例を擧げながらみてみよう。

例5：「訴獵」冒頭の韻文　汲古閣本31

A〔成〕〔外上白〕柳陰樹下一佳人、說與孩兒共姓名。好似河釣呑却線、刺人腸肚繫人心。　父親拜揖。

A〔汲〕〔小生上〕柳陰枝下一佳人、夫增孩兒同姓名。好似和針呑却線、刺人腸肚繫人心。　爹爹、孩兒拜揖。

B〔富〕〔小生上云〕日淡天無職、雪晴氷更堅。凌寒來塞上、拱手立親前。

BC〔歌〕〔小生〕柳陰之下一佳人、父同名姓兒共庚。憶來好似生身母、堂上兀自有萱親。

BC〔摘〕〔小〕　柳陰之下一佳人、父子孩兒共姓名。好似和針呑却線、刺人腸肚繫人心。　爹爹拜揖。

「柳陰樹下一佳人」から始まる七言四句の韻文は、成化本と汲古閣本、そして弋陽腔系テキストの『摘錦奇音』『歌林拾翠』で共通する一方で、富春堂本のみ異なる五言四句の韻文が見える。『摘錦奇音』『歌林拾翠』はこの他の部分では基本的に富春堂本に類似する本文を持つが、この韻文では成化本系統と一致する。

このほか、「遊春」の場面にも、興味深い一致がある。汲古閣本の最初の曲【一剪梅】は、弋陽腔系のテキスト『玉谷新簧』に見える【水紅花】曲に酷似する。なお、同じ場面における富春堂本と『詞林一枝』【夜行船】曲を參考に擧げたが、これらは汲古閣本と『玉谷新簧』の曲とは全く異なっている。

例6：汲古閣本8「遊春」

A〔成〕（なし）

A〔汲〕【一剪梅】〔生上〕春色撩人似酒濃。花影重重。日影重重。

〔旦上〕賣花聲過小橋東。簾捲春風人在春風。

B〔玉〕【水紅花】〔生旦〕春色烟丶意頗濃。花影重重。日影重重。

賣花聲過小橋東。簾捲東風人在東風。

B〔富〕【夜行船】〔生〕花壓欄杆春正遲。見遊蜂粉蝶雙飛。

〔旦〕嫩綠嬌紅。正當此際成就百年姻契。

B〔詞〕【夜行船】〔生〕花壓欄杆日正遲。見遊蜂粉蝶雙飛。

〔旦〕嫩綠嬌紅。正當此際成就百年姻契。

これらの例は、汲古閣本が成化本以外に、弋陽腔系のテキストなどとも直接的ではないであろうが、なんらかの關係も持つことを示していると考えられ、大變興味深い。

富春堂本と風月本は、内容面において共通する部分もある。富春堂本では、岳將軍と岳小姐が、劉智遠の身體から赤い光が發せられるのを見て劉智遠を高貴な人物であると知って壻に迎える、という話になる。また風月本では、富春堂本に見られる場面は曲辭や臺詞の中に見えないが、版面の上部につけられている插繪の中に、岳小姐が劉智遠の身體から氣が立ち上るのを繡房から目擊している圖がある。このことから、風月本がもとづいたテキストが、富春堂本の内容に近い部分を持っていたことにはなるであろう。一方、成化本・汲古閣本ではこれと異なり、劉智遠と岳小姐を結びつける小道具として、岳將軍の白花戰袍が用いられている。汲古閣本17「巡更」に、夜の巡邏をしていた劉智遠に岳小姐が父岳將軍の白花戰袍を與えたところ、白花戰袍が盜まれたと騷ぎになり、犯人として劉智遠が疑われるが、岳小姐が自分が與えたことを話し、二人は婚禮を擧げるという話になっている。

以上の例で見られるように、富春堂本系統においても、同じ物語を題材とするだけでなく、他の系統との間に共通する曲辭を持っていることがわかる。ただ、富春堂本系統にのみ見える場面も、やはり存在するので、それについても指摘しておきたい。

富春堂本第八齣「劉智遠畫堂掃地」は、李太公に見込まれて李家に居候した劉智遠が、畫堂の掃除をする場面である。この場面は『歌林拾翠』や弋陽腔系テキストの『天下春』『萬象新』に收錄され、成化本・汲古閣本など成化本系統には見られない。富春堂本や弋陽腔系獨自の演目であったと考えられよう。

四　汲古閣本における改編

先行研究でも指摘されてきたように、汲古閣本が、基本的に成化本の展開をほぼ沿うように踏襲していることは間違いがない。しかし同時に、前章までで見てきたように、他の系統と共通する曲辭も多數存在することがわかった。このような一致は、汲古閣本が複數のテキストを參照していたことを示している。そこで、汲古閣本がどのような改編を加えているのか見ていくことにしよう。

改めて汲古閣本の書誌を紹介すると、汲古閣本は正式名を『汲古閣六十種曲』といい、崇禎年間に毛晉の汲古閣から刊行されている。名稱にあるとおり、主に南曲を六十種集めたものである。このような戲曲選集である『六十種曲』は、いわば雜劇における『元曲選』に相當する存在であると言いうるであろう。ただし、成立の背景について明らかになっている事柄は、兩者で大きな落差がある。『元曲選』の場合は、編集者の名があらかじめわかっており、收錄する百種の雜劇編集の傾向が研究され、かなり詳しく明らかにされている。[18] ところが、『六十種曲』の場合では、事情がやや異なっている。『六十種曲』は、毛晉の汲古閣から出版されていることは周知のことであるが、誰がどのようなテキストをもとに『六十種曲』にまとめたのか、どのような編集方針で改編をおこなっているのかということについては、實はあ

まりわかっていないのである。しかし、他の系統の本文と比較することによって、汲古閣本『白兎記』の成立の一端を明らかにすることができるのではないかと考える。

まず、汲古閣本と他のテキストとの違い、特に後半部の構成の違いから概觀してみよう。巻末に掲げた對照表に、『白兎記』各テキストの内容構成を示した。成化本には折分け・タイトルはなく、富春堂本にも基本的にタイトルが記されていないため、各折（插話）のタイトルは汲古閣本に據り、［　］で示すことにする。

對照表を見ると、物語の後半に、各テキストによって話の順序が違っているところがある。成化本では、［投軍］（劉智遠、軍に投ずる）、［巡更］（岳小姐が劉智遠を氣に入る）、［拷問］（戰袍紛失のため劉智遠に嫌疑がかかるが、岳小姐がとりなし、劉智遠と婚禮を擧げる）と劉智遠の話を續けた後、［强逼］（三娘が再婚を迫られる）、［挨磨］（三娘が磨房で働かされる）、［分娩］（三娘の出産）、［送子］（三娘が赤子を劉智遠のもとへ送る）というように三娘の話が續く。劉智遠、三娘それぞれの物語が續いていることになるが、逆に言えば、成化本は場面轉換に乏しい展開になっていると言える。

汲古閣本では次のような展開になる（アラビア數字は上卷からの通し番號）。15「投軍」で劉智遠の話をしたあと、16「强逼」で三娘、17「巡更」・18「拷問」で劉智遠、19「挨磨」・20「分娩」で三娘、21「岳贅」で劉智遠、というように、劉智遠と三娘の話が一折ごとにほぼ交互に展開していく。成化本と比べてみると、汲古閣本は場面が細かく分けられ、毎折ごとに場所や人物が變わるように改編が施されていると言える。汲古閣本の話の順序は概ね成化本に一致するものの、16「强逼」などは富春堂本系統に一致する點は非常に興味深い。また一方で、汲古閣本21「岳贅」の位置は、成化本と富春堂本が同じであり、汲古閣本だけ異なる。

さらに、汲古閣本の下卷に見られる、興味深い折數の亂れを見てみよう。巻末對照表、通し番號の27～31（巻下第十四折から第十七折）の箇所である。まず本文の順序をみてみよう。各折のタイトルの數字は上から、通し番號・本文の折數・目錄の番號である。本文に現れる順で、27第十四折⑭「凱回」、28第十六折⑯「汲水」、29第十七折⑮「受封」、30第十六折（目錄無し。「汲水」後半の内容）、31第十七折⑰「訴獵」、のように展開する。通し番號28と30が第十六折、29と31が第十七折であり、また目錄通りの順序でなく（⑮と⑯が入れ替わる）、目錄にない部分（通し番號30）も見える。

このような亂れはなぜ起こったのだろうか。物語本來の展開は、成化本や富春堂本等との比較から推測すると、目錄にある通り、⑭「凱回」（劉智遠が凱旋する）、⑮「受封」（劉智遠が官職を授けられる）、⑯「汲水」（三娘が井戸に水を汲みに行く）、⑰「訴獵」（咬臍が劉智遠に三娘と會ったことを話す）となるのが自然である。おそらく、汲古閣本は折ごとに場面を轉換させるために、⑯「汲水」を前半の三娘が水を汲みに行く場面（第十六折「汲水」）と、後半の三娘と咬臍が出會う場面（第十六折目錄無し）に分け、⑮「受封」の前と後にそれぞれ配列し直すという改編を加えたと考えられる。その結果、目錄の順序と本文の順序とが亂れ、さらに後半の場面は目錄にタイトルが記載されず、そのまま出版されてしまったということなのであろう。これは、當時の書坊の仕事が如何に杜撰であったかということを示す事例といえる。しかしこの杜撰な亂れによって、汲古閣本が一體何を目的として改編を加えたかがうかがえるのである。

實はこの汲古閣本『白兎記』の折數の亂れは、先行研究では全くと言っていいほど言及されていない。ここで敢えて問題にしたのは、大部の戲曲集『六十種曲』の編集のありかたを解き明かすカギの一つになるのではないかと考えるからである。

汲古閣本における改編はこれだけではない。例7は曲辭の入れ替えが行われている例である。成化本の曲辭を適宜區切って番號を附し、對應する汲古閣本の曲辭に同じ番號を附して兩者を見比べてみよう。（【又】と【前腔】には便宜上番號を附す。また□はト書き・臺詞を、（　）は校訂後の文字を表す。）

例7：汲古閣本30「汲水」冒頭

A〔成〕【綿搭絮】「①哥哥直恁不思憶。合你共乳□□□下的淡面皮。發奴晚挨磨、曉去挑水。」每日尋根拔樹、「②討事尋□。」「③□□些手足之親。想我父娘知未之。」

【又1】「④井深乾旱丶水難提。天呀。井□□乾、雙淚眼何曾得住止。奴是富豪女、顛倒做奴奸、莫怪君無□□□是我命如是。」

【又2】「⑤尋思□苦丶丶淚雙垂。夫往邊廷、想我的孩兒倚靠誰。這碗淡飯黃齏。交我怎生充飢。」「⑥每日灣轉獨睡。未曉先起。」「⑦倘有時刻差遲。亂棒打奴不顧體。」

【又3】「⑧別人家哥嫂丶丶有情意。偏我哥嫂丶毒心腸、」

忒下的自骨肉尚如此。何況區丶陌路、那雇人談恥。「⑨我這裏朝夕難挨。想我的劉郎不知己(幾)時回。」

A〔汲〕【綿搭絮】「①⑧別人家兄嫂有親情、唯有我的哥哥下得歹心腸、惡面皮。罰奴夜磨麥。曉要挑水。」

「⑥每夜「手彎」拳獨睡。未曉要先起。」「③那些個手足之親、想我爹娘知未知。」

【前腔1】「④井深乾旱、水又難提。「一井水都被害我吊乾了。」

井有榮枯、淚眼何曾得住止。「介」奴是富家兒、顛倒做了驅使。莫怪伊家無禮。是我命該如是。」「⑦倘有時刻差遲。亂捧打來不顧體。」

（【前腔2】には⑤②に對應する句が見えるが省略）

A〔九〕【綿打絮】「④井深乾旱、水又難提。井有榮枯、淚眼何曾有住止。奴是富家兒、番做了奴婢。莫怪良人無禮。皆因我命乖如是。」

「③那些箇手足之情、」不念同胞共母乳。「①哥哥直恁不思維。和你共乳同胞番得惡面皮。」淚雙垂直兩淚如珠、時常打罵、「②討是尋非。」「⑨朝夕難捱。未知劉郎知不知。」

この例では、汲古閣本は成化本に見える本文を用いながら、順序を入れかえている。このような現象は、「單刀會」の南曲化におけるパターンに類似している。[18] ただし「單刀會」では北曲から南曲への繼承における改編であったが、汲古閣本の場合はそうではない。成化本系統のテキストにおいて、このような入れ替えが行われたのには、讀み物として體裁を整える意圖があったことが考えられるであろう。例えば、成化本「①哥哥直恁不思憶。合你共乳□□□下的淡面皮」は、缺字があるものの、「兄さんは全く考えなし、同じ乳で育った者に冷たい仕打ちをする」というぐらいの意味であろう。これは後の「⑧別人家哥嫂丶丶有情意。偏我哥嫂丶毒心腸」（よその兄さん嫂さんは思いやりがあるのに、うちの兄さん嫂さんだけはひどい心を持っている）とやや重複した內容といえる。このような內容の重複は、實演の場ではさほど珍しいことではなく、ごく普通に見られる表現方法である。しかし、讀み物として考えた場合、このような重複は煩わしい繰り返しに見えるであろう。そこで汲古閣本では、改編の手を加えたと考えられよう。

また、『九宮正始』では、「①哥哥直恁不思維。…⑨未知劉郎知不知。」となっており、これは成化本の「①哥哥直恁不思憶…」と「⑨…想我的劉郎不知己(幾)時回」に近いが、これもやや冗漫な表現を簡潔にまとめようとする方向で書き直されたものと考えられよう。もちろん、『九宮正始』がもとづいたテキストにおいて、すでにこのような改編を施していたことも考えられる。

成化本、汲古閣本、『九宮正始』を竝べて見ると、以上のような合理化がなされていることがわかる。汲古閣本・『九宮正始』の場合、もともと讀むために作られていることが容易に見て取れる。また、刊刻年代が最も古い成化本も、その版面には半葉分の插繪が載せられていることから、娯樂書として讀んで或いは見て樂しむことが刊行目的の一つであったと推測しうる。ただ、本文に繰り返しが多く、必ずしも讀み物として洗練されているとは言い難い。むしろ、戯曲テキストが讀み物化していく初期的段階の特徴を示していると言えよう。一方で、『六十種曲』は、讀み物化の整理が進んでいることになろう。このように、戯曲テキストが讀み物にふさわしく整えられていった過程をうかがうことができるのである。

おわりに

最後に、『白兎記』テキストにおける繼承關係、そして、讀み物化の過程をまとめておきたい。まず、系統の繼承關係では、もともと『白兎記』には、大きく分けて、成化本系統・富春堂本系統という二つの異なる系統が成立していた。また、風月本系統は、成化本・『九宮正始』などと祖本を共有していたと考えられるが、獨自の曲辭や場面も見えることから、現存しない完本が存在したか、或いは一幕もの の戯曲をはめ込んだのか、いずれかの事情で他の系統と異なる曲辭を持つに至ったと考えられる。やがて、各系統相互で一場面をほぼそのまま取り込む現象も起きてきた。

このような現象とともに、テキストそのものを讀み物として整理しようとする動きも強まっていった。本論で取り上げた汲古閣本の場合、その改編は折數や目錄の亂れを引き起こし、杜撰とも言うべきものではあるが、かえってその一端を示していると言える。

これらの動きは、當時書坊で戯曲や白話小說などが量産され、それらが讀み物用テキストとして體裁を整えていく中で進行していったものと言えよう。他の例を擧げれば、雜劇における『元曲選』や、『水滸傳』における金聖歎本などのように、明代後期になると、それまでのテキストを改編し、讀み物としての整理を施す、いわば決定版を作ろうという動きが強まってくるのである。その改編の具體的な中身は、テキストの定型化、用字の統一、また、他のテキストから有名な部分を取り込むことなどであった。本論で取り上げた『白兎記』の場合も、單に戯曲テキストにおける讀み物化という問題だけにとどまらず、こうした流れの中に位置づけることができるものなのである。

今回は南曲『白兎記』についてのみ考察したが、他の戯曲テキストや白話小說などでも、讀み物化の過程の解明を進めていく必要があると考える。また、今回明らかにし得た汲古閣本『白兎記』の性格は、それを收錄する『六十種曲』という大部の戯曲集の編集のありかたと關わっていると考えられる。今後、『六十種曲』所收本でテキストの比較が可能な作品を求め、それらと『白兎記』のケースを比べることにより、研究を深めていきたい。

注

(1) 小松謙『中國歴史小説研究』(汲古書院二〇〇一年一月)。また、西洋の出版史については、リュシアン・フェーブル、アンリ＝ジャン・マルタン『書物の出現』上・下(關根素子・長谷川輝夫・宮下史朗・月村辰雄譯、筑摩書房一九八五年十月、ちくま學藝文庫一九九八年十一月)、ブリュノ・ブラセル著、荒俣宏監修『本の歴史』(創元社一九九八年十二月)を參照した。

(2) 田仲一成『中國演劇史』(東京大學出版會一九九八年三月)。本書では、『琵琶記』をモデルに諸テキストの相互對照を行い、明代末期以降、宗族演劇用のテキスト(汲古閣本等)が、文人に尊重され、出版界で流布本の位置を占めることになったと論じておられる。

(3) 『劉知遠諸宮調』に關する論考としては、金文京「劉知遠の物語」(『東方學』第六十二輯)等が、また成化本に關しては、孫崇濤「成化本『白兎記』與〝元傳奇〟『劉智遠』——關與成化本『白兎記』淵源與性質問題」(『文史』第二〇輯(一九八三年九月)主に成化本と『九宮正始』に收錄される『劉智遠傳奇』の曲辭との關連性を論じたもの)がある。

(4) 成化本については譯註がある。加藤聰・小林春代・高橋文治・谷口高志・富永鐵平・西尾俊・藤原祐子・森下久美子「成化本『白兎記』譯註稿(一)(二)」((一)『中國研究集刊』調號(第三二號)(二〇〇三年六月)・(二)『中國研究集刊』雲號(第三五號)(二〇〇四年六月))。

(5) 田仲一成「明清閒、『白兎記』の流傳と分化」(『金澤大學中國語學中國文學教室紀要』第2輯(一九九八年三月))。

(6) 『白兎記』テキストの先行研究としては、注3、注5前掲論文の他、兪爲民「南戲『白兎記』的版本及其流變」(『宋元南戲考論』(臺灣商務印書館一九九四)所收)、同「南戲『白兎記』考論」(『宋元南戲考論續編』(中華書局二〇〇四年三月)所收)、孫崇濤『風月錦囊考釋』「第四章　『全家錦囊』中的傳本戲文」「六、劉智遠」(中華書局二〇〇〇年七月)等がある。

(7) 注5田仲前掲論文、注6兪前掲論文等を參照。

(8) 注5田仲前掲論文。

(9) 注6孫前掲書。

(10) 注6兪前掲論文。

(11) 本書には一九三〇年代に上海で出された影印本「秋夜月」があり、「秋夜月」と呼ばれることもある。葉德均「秋夜月罕見劇名考」(『戲曲小説叢考』上册(中華書局一九七九年五月))參照。

(12) 富春堂本第三十四折二十三葉裏・同第三十七折二十九葉裏。

(13) 注3孫前掲論文、注6兪前掲書。

(14) 例えば、『琵琶記』の前半部分にも、春を樂しむ場面がある。

(15) 注6兪前掲論文九十七頁では、この例3の後に續く曲辭を引いて、「汲古閣本與元本(筆者注：『九宮正始』所收のもの)基本相同、而富春堂本去元本較遠」とするが、實は富春堂本には兪氏が擧げておられる汲古閣本・元本と同じ曲辭が存在する。確かに富春堂本は汲古閣本とは異なる系統であるのだが、ここはむしろ類似する曲辭が存在することの意義のほうが重要であろう。

(16) 拙論「明代以降における戲曲テキストの繼承について」(『日本中國學會報』第五十六集(二〇〇三年十月))。

(17) 注5孫前掲書では、『風月錦囊』所收「劉智遠」が、汲古閣本系統や富春堂本系統とは異なる別の一系統であることを指摘した上で、他のテキストと一致するかが簡單な表でまとめられている。但し、テキストの繼承に關する言及や、本文の詳細な比較はなされていない。

(18) 赤松紀彦「『元曲選』がめざしたもの」(『田中謙二博士頌壽記念中國古典戲曲論集』(汲古書院一九九一年三月)、小松謙「『元曲選』考」(『東方學報』第百一輯　二〇〇一年一月　のち『中國古典演劇研究』「Ⅱ　明代における元雜劇　第五章　『元曲選』『古今名劇合選』考」

〔汲古書院二〇〇一年十月〕。

(19) 注16前掲論文。

『白兎記』對照表

完本						A	A	A	A	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	BC	BC	BC	C
成化本	汲古閣本			富春堂本	風月本	珊	綴	六	醉	納	籟	九	群	新	天	英	詞	玉	八	紅	摘	微	歌	時
	通し番號	目錄上卷	本文折數	折數・題目																				
[開宗]	1	1 開宗	一	1 開場	1 [開宗]																			
[訪友]	2	2 訪友	二	2 智遠店中沽酒	2 智遠逢友						○	○											○	
×	3	3 報社	三	3 [報社]	×							○												
[祭賽]	4	4 祭賽	四	4 智遠廟中賭錢	×			○				○												
[留莊]	5	5 留莊	五	5 [留莊]	×							○												
[牧牛]	6	6 牧牛	六	6 7 (牧馬)	×							○												
×	×	×	×	8 畫堂掃地	×									○	○								○	
[成婚]	7	7 成婚	七	9 [成婚]	×							○												
×	8	8 遊春	八	10夫婦翫花	3 夫婦游賞	○					○	○		○	○		○	○						
×	9	9 保禳	九	×	×							○												
[逼書]	10	10逼書	十	11[逼書]	4 [逼書]							○												
×	11	11說計	十一	12[說計]	×																			
[看瓜]	12	12看瓜	十二	13 14 15 16[看瓜]	5 三娘送水飯							○												
[分別]	13	13分別	十三	17[分別]	6 夫婦相別							○											○	
×	×	×	×	18王彥章反邠州	×																			
×	×	×	×	19	×																			
		目錄下卷																						
[途嘆]	14	1 途嘆	一	20智遠行路	×							○												
[投軍]	15	2 投軍	二	21 22 23[投軍]	×							○												
—	16	3 强逼	三	24 (25)[强逼]	×							○												
[巡更]	17	4 巡更	四	×	7 小姐繡樓賞翫																			
[拷問]	18	5 拷問	五	×	×							○												
[岳贅]	—	—	—	26[岳贅]	×																			
[强逼]	—	—	—	—	×																			
[挨磨]	19	6 挨磨	六	27[挨磨]	8 三娘挨磨		○	○				○												
[分娩]	20	7 分娩	七	27[分娩]	×								○	○						○				
—	21	8 岳贅	八	—	×																			
×	×	×	×	×	9 慶賀元宵																			
[送子]	22	9 送子	九	28 29[送子]	×				○			○												
×	23	10求乳	十	×	×																			
[見兒]	24	11見兒	十一	30[見兒]	×				○			○												
×	×	×	×	31	×																			
×	25	12寇反	十二	×	×																			
×	26	13討賊	十三	32[討賊]	×																			
×	27	14凱回	十四	×	×							○												
[汲水]前	28	16汲水	十六	33[汲水]前	×																			
×	29	15受封	十七	×	×							○												
[汲水]後	30	(目錄無)	十六	34 35[汲水]後	10三娘汲水	○		○				○	○		○				○		○	○	○	○
[訴獵]	31	17訴獵	十七	36 37[訴獵]	×			○			○	○									○		○	
[私會]	32	18私會	二十	38[私會]	11打破磨房					○			○	○		●						○	○	○
[團圓]	33	19團圓	二十一	39[團圓]	×																			

注１：富春堂本には各折に題目が記されていないため、便宜的に汲古閣本と內容が對應する箇所については、汲古閣本の題目を[　]をつけて記す。また插繪の題目で代用したものはそのまま記してある。「×」は該當場面が見えないことを示し、「—」は別の箇所に對應する部分があることを示す。　注２：九宮正始は曲牌別に曲文を收錄したテキストである。該當する場面に○をつけているが、その場面の曲すべてを收錄しているわけではない。　注３：「●」は目錄のみで原文が缺けていることを示す。